

8.16 [日]	第3回 東京オペラシティ名曲シリーズ 東京オペラシティ コンサートホール／14時開演 The 3rd Tokyo Opera City Popular Series Sunday, 16th August, 14:00 / Tokyo Opera City Concert Hall
17 [月]	読響サマーフェスティバル2015《三大交響曲》 東京芸術劇場／18時30分開演 YNSO Summer Festival "Three Greatest Symphonies" Monday, 17th August, 18:30 / Tokyo Metropolitan Theatre
18 [火]	読響 夏の三大交響曲 パルテノン多摩 大ホール／15時開演 ※プログラムは「月刊オーケストラ」とは別のものを当日配布致します。

指揮／ケン＝デイヴィッド・マズア Conductor KEN-DAVID MASUR P.6

コンサートマスター／ダニエル・ゲーデ Concertmaster DANIEL GAEDE

シューベルト 交響曲 第7番 ロ短調 D759 〈未完成〉 [約25分] P.11

SCHUBERT / Symphony No. 7 in B minor, D759 "Unfinished"

- I. Allegro moderato
- II. Andante con moto

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉 [約31分] P.12

BEETHOVEN / Symphony No. 5 in C minor, op. 67

- I. Allegro con brio
- II. Andante con moto
- III. Allegro
- IV. Allegro

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉 [約40分] P.13

DVOŘÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

- I. Adagio – Allegro molto
- II. Largo
- III. Molto vivace
- IV. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 (8/16、17)

[主催] 多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社 (8/18)

[事業提携] 東京芸術劇場 (8/17)

8.21 [金]	読響サマーフェスティバル2015《三大協奏曲》 東京芸術劇場／18時30分開演 YNSO Summer Festival "Three Greatest Concertos" Friday, 21st August, 18:30 / Tokyo Metropolitan Theatre
----------	--

指揮／下野竜也 (首席客演指揮者) Principal Guest Conductor TATSUYA SHIMONO P.7

ヴァイオリン／服部百音 Violin MONE HATTORI P.9

チェロ／アンドレアス・ブランテリド Cello ANDREAS BRANTELID P.9

ピアノ／HJ リム Piano HJ LIM P.10

コンサートマスター／ダニエル・ゲーデ Concertmaster DANIEL GAEDE

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] P.14

MENDELSSOHN / Violin Concerto in E minor, op. 64

- I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
- III. Allegro non troppo – Allegro molto vivace

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 ロ短調 作品104 [約40分] P.15

DVOŘÁK / Cello Concerto in B minor, op. 104

- I. Allegro
- II. Adagio ma non troppo
- III. Allegro moderato

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23 [約32分] P.16

TCHAIKOVSKY / Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23

- I. Allegro non troppo e molto maestoso – Allegro con spirito
- II. Andantino semplice
- III. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[事業提携] 東京芸術劇場

8.23 [日]

第179回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場／14時開演
The 179th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series
Sunday, 23rd August, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／下野竜也 (首席客演指揮者) Principal Guest Conductor TATSUYA SHIMONO P.7

チェロ／アンドレアス・ブランテリド Cello ANDREAS BRANTELID P.9

コンサートマスター／ダニエル・ゲーデ Concertmaster DANIEL GAEDE

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 ロ短調 作品104 [約40分] P.15
DVOŘÁK / Cello Concerto in B minor, op. 104
I. Allegro
II. Adagio ma non troppo
III. Allegro moderato

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第8番 ト長調 作品88 [約34分] P.17
DVOŘÁK / Symphony No.8 in G major, op.88
I. Allegro con brio
II. Adagio
III. Allegretto grazioso
IV. Allegro ma non troppo

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 参文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業)
[事業提携] 東京芸術劇場

8.27 [木]

第11回 読響カレッジ
文京シビックホール／20時開演 (19時30分から解説)
The 11th Yomikyo College
Thursday, 27th August, 20:00 (Pre-concert talks from 19:30) / Bunkyo Civic Hall

指揮／鈴木秀美 Conductor HIDEMI SUZUKI P.8

ナビゲーター／七尾藍佳 Navigator AIKA NANA0

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ベートーヴェン 交響曲 第3番 変ホ長調 作品55 〈英雄〉 [約47分] P.19
BEETHOVEN / Symphony No. 3 in E flat major, op. 55 "Eroica"
I. Allegro con brio
II. Marcia funebre. Adagio assai
III. Scherzo. Allegro vivace
IV. Finale. Allegro molto



ナビゲーター
七尾藍佳 Aika Nanao

ジャーナリスト。2006年から11年まで日本テレビ系列News Zeroの現場・スタジオキャスター。14年9月までBloombergTV東京支局特派員として活躍。国際通貨基金(IMF)など、国際的な金融イベントの司会等も務める。その後、フリーのジャーナリストとして、ハフィントン・ポスト日本版等に寄稿し、独自の視点でニュースを読み解く記事を発表。東京大学教養学部出身。ワシントンD.C.生まれ。現在1児の母。15年4月より産業能率大学経営学部兼任講師。

※今回のみ、都合によりナビゲーターが中井美穂から変更になりました。

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。*No intermission

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[共催] 文京シビックホール (公益財団法人文京アカデミー)

ケン＝ デイヴィッド・ マズア

Ken-David Masur

父はドイツの巨匠
進境著しい若手指揮者
読響に初登場

ドイツの巨匠で、長年ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の音楽監督を務めたクルト・マズア（読響名誉指揮者）を父に、1977年ライプツィヒに生まれた。6歳からピアノを学び、ライプツィヒ音楽院を経て、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学で学ぶとともに、父クルトに指揮を師事した。その後、父クルトが91年からニューヨーク・フィルハーモニックの音楽監督を務めたこともあって米国へ移り、99年にニューヨーク・コロンビア大学のバッハ協会管弦楽団・合唱団の音楽監督に就任。J・S・バッハ、C・P・E・バッハ、W・F・バッハの交響曲やカンタータを録音し、指揮者としてのキャリアをスタートさせた。

2004～06年にフランス国立管の副指揮者を務めたほか、ミュンヘン響首席客演指揮者などを歴任。14年からボ



©Beth Ross-Buckley

ストン響の副指揮者となったほか、米サンディエゴ響とも仕事をしている。今までにドレスデン・フィル、イスラエル・フィル、トゥールーズ国立管、ロシア・ナショナル・フィルなどに客演し、日本では日本フィルと広島響を指揮している。

また、ピアニストの妻と共に、ニューヨークで毎年夏に開かれているチェルシー音楽祭の芸術監督を務めており、その手腕は地元のニューヨーク・タイムズ紙から高く評価された。

読響とは今回が初共演。

- ◇8月16日 東京オペラシティ名曲シリーズ
- ◇8月17日 読響サマーフェスティバル2015《三大交響曲》
- ◇8月18日 読響 夏の三大交響曲

下野 竜也

(首席客演指揮者)
Tatsuya Shimono

交響曲を全曲演奏した
得意のドヴォルザークで
作品の神髄に迫る

2006年11月から13年3月まで読響の初代正指揮者を務め、現在は首席客演指揮者。古典から現代までの幅広いレパートリーと独自のプログラミングで話題を呼んでいる。今回は得意とするドヴォルザークの〈チェロ協奏曲〉と〈交響曲第8番〉で、どんな解釈を聴かせてくれるか。

1969年鹿児島生まれ。鹿児島大学教育学部音楽科、桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室、イタリア・シエナのキジアーナ音楽院で学んだ後、大阪フィルの指揮研究員となり朝比奈隆氏に巨匠たちの薫陶を受けた。文化庁派遣芸術家在外研修員としてウィーン国立演劇音楽大学に留学中、2000年の東京国際音楽コンクールと01年のブザンソン国際指揮者コンクールで優勝を飾った。

国内の主要オーケストラはもとより、チェコ・フィル、シュトゥットガルト放送



©読響

響、ローマ・サンタチェチーリア管などと共演し、国際的に活躍するほか、上野学園大学教授として後進の指導に当たっている。また、出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣賞、東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門奨励賞など受賞も数多い。14年9月には読響とカレル・フサの〈この地球を神と崇める〉を日本初演し、ミュージック・ペンクラブ音楽賞を受賞している。

- ◇8月21日 読響サマーフェスティバル2015《三大協奏曲》
- ◇8月23日 東京芸術劇場マチネシリーズ

鈴木秀美

Hidemi Suzuki

チェロの名手
近年は指揮でも活躍
古典派の解釈に定評

日本におけるチェロの第一人者。近年は指揮活動にも積極的に、古典派の作品解釈では定評がある。1957年神戸生まれ。チェロを井上頼豊、安田謙一郎、指揮を尾高忠明、秋山和慶に学んだ。桐朋学園大学卒業後、オランダのデン・ハーグ音楽院に留学し、バロック・チェロの世界的巨匠、アンナ・ビルスマに師事。フランス・ブリュッヘンが設立した「18世紀オーケストラ」やシギスヴァルト・クイケン率いる「ラ・プティット・バンド」に在籍し、94～2000年までブリュッセル王立音楽院でバロック・チェロの教授も務めた。

兄でオルガン・チェンバロ奏者、指揮者の鈴木雅明が設立した「バッハ・コレギウム・ジャパン」で創設時から昨年まで首席チェロ奏者を務めていたほか、2000年に帰国した後はソリスト、室内楽奏者としても幅広く活躍している。



©K. Miura

日本人奏者として初めてオリジナル楽器によるバッハ〈無伴奏チェロ組曲〉を録音した。

01年、古典派を専門とするオリジナル楽器オーケストラ「オーケストラ・リベラ・クラシカ」を設立し、音楽監督に就任。ハイドンの交響曲を中心としたレパートリーで高い評価を得ており、ライブ録音もリリースされている。また国内では名古屋フィルと山形響、海外ではポーランド、ベトナム、オーストラリアのオーケストラにも客演している。

今回が読響初登場となる。

◇8月27日 読響カレッジ

A rtist of the month

今月のアーティスト

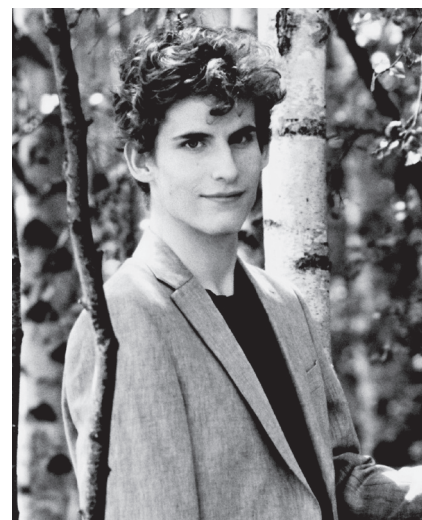


ヴァイオリン 服部百音

Violin Mone Hattori

1999年東京生まれ。5歳でヴァイオリンを始め、名教師のザハール・ブロン、辰巳明子に師事した。2009年に「ヴィエニャフスキ国際音楽コンクール」ジュニア部門で最年少優勝。13年に「ノヴォシビルスク国際ヴァイオリンコンクール」シニア部門、今年1月には「ボリス・ゴールドシュタイン国際ヴァイオリンコンクール」で優勝。その後、アシュケナージ指揮のEUユース管と共演し、ヨーロッパデビューを果たした。読響とは初共演。使用楽器は上野製薬より貸与のピエトロ・ガエルネリ。現在東京音大付属高校特別特待奨学生。

◇8月21日 読響サマーフェスティバル2015《三大協奏曲》



©Sussie Ahlburg

チェロ アンドレアス・ブランテリド

Cello Andreas Brantelid

1987年デンマーク生まれ。幼少時からチェロ奏者の父にチェロを学び、14歳でデンマーク国立管とエルガーの〈チェロ協奏曲〉を共演してデビューした。オーケストラではチューリッヒ・トーンハレ管、バーミンガム市響、スコットランド室内管ほか、指揮者ではネルソンス、サカリ・オラモ、ジョナサン・ノットらと共演。2014シーズンはパブロ・ヘラス＝カサド指揮のマーラー・チェンバー・オーケストラと、デュティユーのチェロ協奏曲〈遥かなる遠い国へ〉を共演し、好評を博した。室内楽奏者としても活躍している。読響とは初共演。

◇8月21日 読響サマーフェスティバル2015《三大協奏曲》

◇8月23日 東京芸術劇場マチネシリーズ



©Warner Classics

ピアノ HJ リム

Piano HJ Lim

1987年ソウル生まれ。12歳で単身フランスに渡り、パリ国立高等音楽院でアンリ・バルダに師事。家族に演奏を聴かせるためにYouTubeに投稿した動画が注目を集め、2011年にEMIクラシックス（現ワーナー・クラシックス）と専属契約し、ベートーヴェンの「ピアノ・ソナタ全集」で衝撃的なデビューを果たした。録音ではほかにラヴェルとスクリャービンの作品集をリリースしている。今までにロイヤル・リヴァプール・フィルやシアトル響と共演しており、昨秋にはノリントン指揮のチューリッヒ室内管弦楽団とアジアツアーを行った。

読響とは初共演。

◇8月21日 読響サマーフェスティバル2015《三大協奏曲》

8.16 [日]

8.17 [月]

8.18 [火]

柴辻純子（しばつじ じゅんこ）・音楽評論家

シューベルト 交響曲第7番 ロ短調 D759 〈未完成〉

作曲：1822年／初演：1865年12月17日、ウィーン／演奏時間：約25分

新しい響きへの試行錯誤

フランツ・シューベルト（1797～1828）の創作の中期（1820～24年）には未完成の作品がいくつかあるが、この交響曲もそのひとつである。シューベルトは、これまで誰も聴いたことがない響きを交響曲で実現したいと考えて、試行錯誤の末、ロ短調の新しい交響曲に着手する。尊敬するベートーヴェンの第5交響曲を手本に、トロンボーンは3本で、主題を循環させて全体を構成しようとした。ピアノ・スケッチは第3楽章の途中まで完成していたので、最初の二つの楽章は順調に進んだ。しかし、第3楽章に入ったところで作曲は中断されてしまう。翌年には自筆譜を年長の知人に渡してしまい、作曲が再開されることはなかった。

楽譜はシューベルトの死後、1865年にウィーン楽友協会の指揮者ヨハン・ヘルベックによって発見され、彼の指揮で初演された。

第1楽章 アレグロ・モデラート チェロとコントラバスのもの悲しい序奏に続いて、オーボエとクラリネットでのびやかな第1主題が歌われ、チェロで始まる第2主題は憧れに満ちている。この二つの主題が劇的に展開する。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 弦楽器の穏やかな第1主題と木管楽器で歌い継がれる第2主題が提示され、ホルンと木管楽器の対話を経て主部が再現される。安らぎに満ちた美しさと苦悩の間を揺れ動きながら静かな余韻を残す。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

作曲：1807～1808年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分

精神的な危機の克服が生んだ到達点

冒頭の四つの音から成る動機について、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が「運命はこのように扉をたたく」と語ったという逸話から、交響曲第5番は〈運命〉の通称で親しまれている。しかし今ではこれは、弟子のアントン・シンドラーによる作り話との説が有力である。

第5番は、断片的なスケッチこそ第3番の〈英雄〉を完成直後の1804年頃から見られるが、実際の作曲は、07年から翌年にかけて第6番〈田園〉とともに集中的に行われた。1802年に精神的な危機を克服して以来、個性的な傑作の数々が生み出されたが、これらの交響曲は、そのひとつの到達点といえるだろう。

第5番は、強烈な印象を残す「運命動機」がさまざまなかたちで各楽章に現れ、交響曲全体を統一する。そしてこの動機を中心とする闘争的な性格と、後半では「闇から光へ」という勝利へ至る道筋が音楽で強調された。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ
「運命動機」が次々とたたみかける第1

主題と、ホルンの導入を経て現れる穏やかな第2主題によるソナタ形式。緊迫した音楽が展開されるなか、再現部でオーボエの旋律が浮かび上がると、ふと流れが止まった印象を与える。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート
第1楽章の緊張がほぐれる、優しい主題で始まる。二つの主題による変奏曲。

第3楽章 アレグロ 低音の弦楽器の湧き上がるような主題と、ホルンによる「運命動機」の変形を用いたスケルツォ楽章。明朗な中間部「トリオ」を挟み、最後に弱音のティンパニの連打に導かれて切れ目なく終楽章に突入する。

第4楽章 アレグロ 音楽は短調から長調へと移り、「闘争から勝利へ」導かれる。その勝利を強調するかのように、ベートーヴェンの交響曲で初めて3本のトロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットが採用された。力強い第1主題と「運命動機」に由来する第2主題が提示される。展開部で第3楽章の主題が現れ、一瞬、過去の闇を回想するが、最後は大きなコーダで全曲を堂々と締めくくる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分

米国の素材とスラヴ的情熱の融合

チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）の最後の交響曲となった第9番は、アメリカ滞在中の1893年に作曲された。前年にニューヨークのナショナル音楽院の初代院長に招かれて渡米したドヴォルザークは、都会の喧騒や冬の厳しい寒さに戸惑いながらも、新しい土地で新たな創作意欲をかき立てられた。当地で知った黒人霊歌やアメリカ先住民の歌や民謡に触れるうちに、アメリカの音楽への興味も広がっていった。

ドヴォルザークは、自作にこれらの要素を取り入れるが、民謡の旋律をそのまま引用するのではなく、アメリカ的な素材にスラヴ的な情熱を融合させて用いた。この交響曲では中間の二つの楽章で、ロングフェローがアメリカ先住民の神話的英雄を扱った長編物語詩「ハイアワサの歌」から着想を得ているが、そこにはボヘミアへの郷愁の思いも込められている。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・モルト ゆるやかな序奏を経て、力強い

主部に入ると、ホルンの鋭いリズムが特徴的な第1主題が提示され、これは、続く三つの楽章でも現れる。フルートとオーボエのボヘミアのボルカを思わせる主題や、フルートによる^{ひな}鄙びた味わいの第2主題が加わり展開する。

第2楽章 ラルゴ 有名な旋律が、イングリッシュ・ホルンでしみじみと歌われる。中間部で管楽器はコントラバスのピッツィカートとともに歌い、ヴァイオリンの豊かな旋律も印象的である。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ
ティンパニとトライアングルの強打で開始される民俗舞曲風の音楽。主題がさまざまな楽器に受け渡され、木管楽器が主体となる中間部は、軽やかに歌われる。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ
弦楽器の序奏の後、トランペットとホルンによる強烈な第1主題と、クラリネットによる穏やかな第2主題が現れる。展開部ではこれまでの三つの楽章の主題が回想され、壮大なクライマックスへと向かう。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、弦五部

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

作曲：1844年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分

画期的な試みを盛り込んだ名作

ドイツ・ロマン派を代表する作曲家、フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）。20歳の時に〈マタイ受難曲〉の復活演奏をしてバッハ再評価に貢献し、1835年にはライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者に就任、そして43年にライプツィヒ音楽院を創設する。

この作品が構想されたのは、1838年である。しかし、ベルリンの宮廷楽団の楽長に就任するなど多忙を極め、創作は断続的であった。ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスター、フェルディナント・ダーヴィトに助言を受けながら作曲を進め、45年3月に初演を果たす。その際、メンデルスゾーンは病気療養中のため、彼の弟子で同楽団副指揮者ニルス・ゲーゼが指揮台に立ち、ダーヴィトがソリストを務めた。第1楽章では、オーケストラによる長い前奏を

置かずに独奏ヴァイオリンによって音楽が始まり、展開部から再現部の間にカデンツァを挟む。また、三つの楽章を続けて演奏するなど、当時としては画期的な試みがさまざまに見られる。

第1楽章 弦楽器による2小節の序奏に導かれ、独奏ヴァイオリンは哀愁に満ちた第1主題を奏でてゆく。独奏ヴァイオリンの華やかな演奏技巧の活かされたソナタ形式による楽章。

第2楽章 第1楽章から鳴り響くファゴットの調べにいざなわれ、8小節の序奏が現れる。3部形式に基づいた音楽は、優美な情趣に満ちあふれている。

第3楽章 ホ短調の序奏には、第2楽章中間部のモチーフが用いられており、前楽章と緊密に結びついている。ホ長調に転じると、二つの主題が競り合うように展開し、華麗なフィナーレを彩る。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

作曲：1895年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分

祖国ボヘミアへの郷愁色濃く

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）はボヘミアの出身で、若い頃は楽団のヴィオラ奏者として活動していた。ブラームスに見出され、〈スラヴ舞曲集〉によって国際的に知られるようになる。後期ロマン派のスタイルを礎とし、そこにボヘミアの民俗的な表現を取り入れ、親しみやすい独自の作風を確立した。

米国ナショナル音楽院の院長の職に就くために、1892年から95年までニューヨークで暮らすことになったドヴォルザーク。その間に、ボヘミア出身のチェロ奏者ハヌシュ・ヴィハンから、チェロ協奏曲の作曲を依頼される。1894年11月、この作品の創作に着手したドヴォルザークは、翌年2月にいったん書き上げ、さらに推敲を加えて6月に最終的な完成に至った。初演はドヴォルザークの指揮、そしてレオ・スターンのチェロ独奏により、1896年にロンドンで行われた。

アメリカ滞在中のドヴォルザークの作品の多くには、アメリカの民謡や歌

曲が取り入れられている。しかし、この協奏曲は、祖国ボヘミアへの郷愁を強く感じさせる。ドヴォルザークがアメリカから帰郷した1895年、彼の初恋の人で義姉にあたるヨゼフィーネ・コウニツォヴァーが亡くなってしまう。彼女は、ドヴォルザークの歌曲〈私にかまわないで〉を好んでいた。第2楽章中間部と第3楽章コーダに、彼はこの歌曲の一部を引用する。とりわけ第3楽章のコーダは、彼女が亡くなった後に書き換えられており、ドヴォルザークの哀しみや故郷への愛が込められている。

第1楽章 曲の冒頭にクラリネットが奏でる主要主題と、強奏によるトゥッティに続いて示されるホルンによる表情豊かな副主題を軸に、独奏チェロが華麗な妙技を繰り広げていく。

第2楽章 三部形式に基づき、木管楽器が歌い上げる牧歌的な旋律が印象的な主部ののち、ト短調の中間部では表情が一変する。美しい叙情性に満ち満ちた音楽。

第3楽章 自由なスタイルのロンド形式で、前述したコーダが付加されている。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

チャイコフスキー ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

作曲：1875年／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分

超絶技巧と新奏法の魅力随所に

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、西欧の音楽語法を土台にウクライナの民謡などを融合し、独自の透明で優美な表現を確立した。法務省に勤務したものの、音楽を志すべく1861年にアントン・ルビンシテインがサンクトペテルブルクに開設した音楽学校で専門教育を受ける。卒業後はアントンの弟、ニコライがモスクワに新たに創設した音楽院に、作曲の教師として赴任した。

チャイコフスキーは3曲のピアノ協奏曲を手掛けている。本日演奏される第1番は1875年2月に書き上げられた。彼はニコライ・ルビンシテインに初演を依頼したところ、ニコライは形式や調性の選択などの点での「不器用さ」を指摘し、作品を批判する。

そこでチャイコフスキーは、作曲家で名ピアニストのハンス・フォン・ビューローにこの曲の初演を依頼すると、ビューローは作品を絶賛。同年10月にボストンで初演された後、作品には修正や改訂が施され、現在演奏され

ている〈ピアノ協奏曲 第1番〉も改訂稿である。第1楽章に長大な導入部をとり入れたり、ソナタ形式をとりつつも再現部で主題が回帰しないなど、この曲は伝統的な古典派のピアノ協奏曲のスタイルにとらわれていない。何と言っても、魅力は超絶技巧的なピアノ・パートの妙技である。分厚い和音やオクターヴ奏法など、当時の新しいピアノ奏法が随所に用いられ、“ヴィルトゥオーソ協奏曲”を代表する絢爛豪華な作品である。

第1楽章 堂々とした風格の長い導入部の後、変ロ短調のソナタ形式主部が続く。665小節にも及ぶ長大な楽章。**第2楽章** 夢幻的な雰囲気のある緩徐楽章。中間部では、フランスのシャンソンからの引用をヴィオラとチェロが奏でる。**第3楽章** オーケストラの前奏に続き、ウクライナ民謡をとり入れたロンド主題をピアノが提示する。この主題は、のちに現れるヴァイオリンによる変ニ長調の副主題とともに緊密に展開し、圧倒的なクライマックスを形成する。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

8.23 [日]

鉢村 優（はちむら ゆう）・音楽ライター

※ドヴォルザーク〈チェロ協奏曲 ロ短調 作品104〉の楽曲紹介はP15をご覧ください。

ドヴォルザーク 交響曲 第8番 ト長調 作品88

作曲：1889年／初演：1890年2月2日、プラハ／演奏時間：約34分

英国での評価背景に「チェコ」を世界にアピール

チェコの作曲家、アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は、現在のポーランドとの国境に位置するヴィソカーという静かな村の別荘で、多くの名作を生んだ。そのうちの一つである交響曲第8番は、夏の緑と初秋の木立の中で書き進められ、1889年11月に完成した。すでに作曲家として国際的にも認められつつあった時期である。脂の乗りきった筆による伸びやかな旋律と、ボヘミアのリズム。そんな豊かなチェコの色彩にプラハの人々は大いに共感し、初演は熱狂的に迎えられたという。

第8番は「イギリス」という名で呼ばれたこともあった。というのも、ドヴォルザークはこの交響曲をきっかけに、長年契約を結んでいたドイツの出版社ジムロックと袂を分かち、イギリスの出版社ノヴェッロへと鞍替えしたからである。ジムロックはブラームス

から紹介された出版社だったが、安い作曲料で小品ばかり書かせようとするので、ドヴォルザークは反発を感じていたとされる。

背景には、ドヴォルザークとイギリス音楽界との急速な接近があった。彼は第8番の作曲に先立つ1884年にロンドン・フィルハーモニック協会の招きで初訪英すると、すぐに新たな交響曲（第7番）を委嘱された。その後もイギリス各地から招待されて、自作を指揮して大喝采を受けている。

なおドヴォルザークは、1891年にケンブリッジ大学から名誉音楽博士号を授与された。この時彼が指揮したのは、交響曲第8番と〈スターバト・マーテル〉だった。いずれも、イギリスで最も高く評価された作品である。

当時、イギリスでの評価は世界的に影響力を持つものであった。演奏会の反響が伝えられると、ドヴォルザーク

読響カレッジ



8.27 [木]

柴田克彦(しばた かつひこ)・音楽ライター

ベートーヴェン

交響曲第3番 変ホ長調 作品55 〈英雄〉

作曲：1803～04年／初演：1805年、ウィーン／演奏時間：約47分

耳疾と闘い理念を表現した楽聖

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)は、ハイドン、モーツァルトに続くウィーン古典派の巨匠であり、ご存じの通りクラシック音楽の象徴ともいえる作曲家です。

宮廷歌手の父のもと、ドイツのボンに生まれた彼は、ハイドンの勧めで1792年ウィーンへ進出。当初は貴族のサロンを中心にピアニストとして名を上げ、すぐに作曲家としても活躍し始めました。

そして耳の病と闘いながら、アイデア豊富な新作を次々と発表。1803～15年頃は「傑作の森」と呼ばれる中期には、交響曲第5番〈運命〉をはじめ、後のクラシック界の中核を成す、劇的で明快な名曲の数々を生み出し、ほとんど耳が聞こえなくなった後期には、交響曲第9番〈合唱付〉などの深遠な傑作を残しました。

ベートーヴェンは、歴史的大家の中

では初めて、生涯のほぼすべてをフリーランスで通した作曲家です。彼は、雇い主である宮廷や教会のために新作を大量生産した従来の作曲家とは違って、貴族の後援を得ながら自由な創作活動を行い、1曲1曲が「芸術」と呼ぶに相応しい作品を作曲。フランス革命に伴う変革期を背景に、人間性や崇高さ、さらには「苦悩を経て歓喜へ」といった理念を音楽で表現しました。その結果、9曲の交響曲、16曲の弦楽四重奏曲、32曲のピアノ・ソナタが、各ジャンルのバイブル的存在となったほか、さまざまな形態で指標となるスタイルを確立し、ロマン派以降の作曲家に絶大な影響を与えました。

ちなみに、「楽聖」の呼称から硬派な印象を受けますが、恋愛のエピソードも多数あります。生涯独身とはいえ、その方面でも相当な情熱家だったようです。

の元には新作の委嘱や作品の買い取り依頼が相次ぐようになる。しかし、彼の望んだのは、個人的な成功以上に、チェコの歴史や文化を外国にアピールすることだったと言われている。チェコの英雄、聖人、また民俗舞曲といった題材をもとに作曲するドヴォルザークは「民俗的色彩をもつ国際的な作曲家」として認知されていった。

彼の名声は遠くアメリカにも伝えられ、ニューヨークのナショナル音楽院の院長として招かれることになる。そこでドヴォルザークは、黒人霊歌をはじめとするアメリカの音楽に影響を受けていくのであった。

交響曲第8番は、今まさに世界に羽ばたこうとする「チェコのドヴォルザーク」の魅力が最も色濃くあらわれた作品である。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ ソナタ形式。チェロを主体とした優美な哀歌で始まり、フルートの先唱をオーケストラ全体が躍動感ゆたかに展開していく。めまぐるしく顔を出す多彩な旋律はドヴォルザークの大きな特徴である。

第2楽章 アダージョ 自由な3部形式。弦が奏でるメランコリックな旋律に、木管楽器を主体としたやわらかい音楽が起伏に富んで展開される。フル

ートとオーボエの明るい旋律が忙しい伴奏の上に登場し、やがてコンサートマスターが朗々と主旋律を引き継ぐ。これをうけてオーケストラは急速に活気を呈するが、長くは続かない。静と動を自在に行き来しながら、やがて消え入るように終わる。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ 3部形式。ヴァイオリンの躍動的で哀愁を帯びた旋律にワルツ風のトリオが挟まれ、結尾にはトリオ部分の旋律が華やかに変形される。一般に、優美な第2楽章に対して第3楽章には速いスケルツォが置かれることが多いが、ドヴォルザークは第2、3楽章ともにゆったりとした3部形式を用いている。

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo 変奏曲形式。トランペットの輝かしいファンファーレで始まり、変奏主題がチェロによって提示される。これは第1楽章冒頭でフルートが奏した旋律から編まれたものである。主題を十数回にわたって変奏しながら、曲は次第に熱狂を強めていく。再びチェロに主題が提示されて静かに変奏が始まり、やがて喧騒のうちに華々しく幕を閉じる。

楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

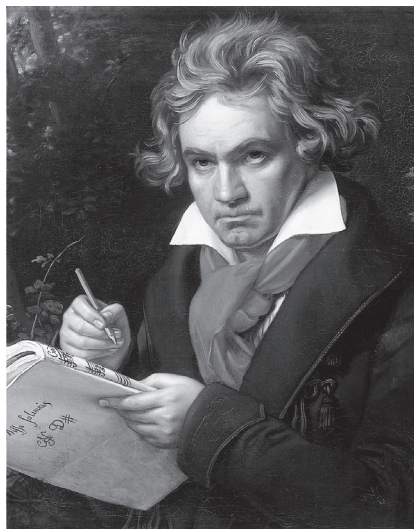
新境地への強い意志と作曲技法が融合

第3番は交響曲の歴史に新たな1ページを^{しる}印した作品です。交響曲第2番の完成から間もない1803～04年に作曲され、曲を献呈されたロプコヴィツ侯爵邸で非公開初演の後、1805年4月にアン・デア・ウィーン劇場で公開初演されました。

この曲は、「ベートーヴェンは、貧困層から出て王制と闘ったナポレオンに共感して作曲したが、1804年彼が皇帝に即位したのを聞いて激高。『あの男も権力を得たいだけの俗物だった』と叫んで、スコアに記した献辞を激しく^か掻き消し、新たに『ある英雄の思い出に捧げる』と書いた」との逸話で知られています。ただし、曲自体のナポレオンとの直接的な関連性は不明確。みずから「エロイカ」（イタリア語の「英雄」）と記していますから、“英雄的”な音楽であるのは確かですが、もっと象徴的に捉える見方もあります。

いずれにせよ、1802年に「ハイリゲンシュタットの遺書」を書くことで耳疾の絶望感を克服したベートーヴェン

の、新境地へ挑む強い意志が、作曲技法の進化と融合した、類い稀な意欲作です。最大の特徴は、従来の交響曲とは一線を画した長大さと巨大さ。さらには、主和音2連打の大胆な開始、葬送行進曲の採用、第3楽章のホルン3本の効果的活用、交響曲のフィナーレに



は珍しい変奏曲の採用等々、画期的な要素が目白押しです。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 開始直後にチェロが出す第1主題が全体の中心を成す、破格の推進力をもった楽章。

第2楽章 葬送行進曲、アダージョ・アッサイ ハ短調の

悲痛な行進曲。中間部はやや明めのトーンに変化します。

第3楽章 スケルツォ、アレグロ・ヴィヴァーチェ 軽快な主部に、ホルンのフレーズが印象的な中間部が挟まれます。

第4楽章 フィナーレ、アレグロ・モルト バレエ音楽〈プロメテウスの創造物〉終曲から採られた主題の変奏を中心に進行。フーガや穏やかな部分を経て、堂々と結ばれます。